

写真展 福島、東北

2022年度福島県立博物館冬の企画展

写真家たちが捉えた風土／震災

東日本大震災ではこれまでの災害とは異なるさまざまな対応が見られました。

その一つが膨大な画像が残され、それらが広く拡散されたことです。阪神淡路大震災の頃にはまだ普及していなかったスマートフォンやSNSがこの現象の基底にあるのは言うまでもありません。また、被害状況を記録し伝える報道写真の精度も上がり、被災地に向き合った写真家の中からは被災の現状を超えて、被災地の歴史文化、人々の生活、さらには命のつながりを見つめるすぐれた作品が残されました。

震災からまもなく丸12年。風化、忘却が確実に進行する中、それでも震災体験から得た思考、感覚を磨き続け永遠に残る作品が生み出されています。

本展では、震災直後から現在も福島を拠点に福島を見つめ続け、普遍的な作品を精力的に制作し、近年高い評価を得ている3人の写真家、岩根愛、岩波友紀、村越としや各氏の作品をご紹介します。

岩波 友紀 【紡ぎ音 #078請戸の田植踊】（個人蔵）

岩波友紀氏は、全国紙写真部での報道写真の撮影を続け、東日本大震災での撮影を機に福島に移住。福島、東北で撮影を続け、ドキュメンタリー写真のリアリティーにアートの力を重ねる試みが高く評価されています。現在は会津美里町に移り、被災地を含めた福島を俯瞰的に見つめています。



村越 としや 【2016年 福島県須賀川市】（福島県立博物館蔵）

村越としや氏は、須賀川市に生まれ、現在は拠点のある東京と実家のある須賀川を往復しながら、福島の一見何気ない風景を撮り続け、人の思考や認識による風景の変化と矛盾を写真を通して問いかけています。モノクロの作品は静謐さの中に、土地に漂うある種の不穏な気配を写しとっているかのようです。

岩根 愛 【A NEW RIVER】（個人蔵）

岩根愛氏は、1991年度米シオフグリッドの暮らしの中で学び、その後写真家として活動。2006年よりハワイと福島の関わりをテーマに制作。震災後双葉町の盆踊りと出会い、三春町にも拠点を構えながら、地域を超えた人の交流を追いかけています。近年の作品は自然と人間が一体化した大きな生命力を捉えています。

会期／2023年1月21日(土) ⇒ 3月19日(日)

主催：福島県立博物館 会場／福島県立博物館企画展示室

開館時間／9:30～17:00(入館は16:30まで) 休館日／月曜日 2月24日(金)

観覧料／一般・大学生800円(640円)、高校生以下は無料 ※()内は20名以上の団体料金、企画展料金で常設展もご覧いただけます。

年間パスポート：2,000円 ※ご購入日より1年間、当館の常設展・企画展を何回でもご覧いただけます。

Twitterで「あなたの福島」が集まった「福島写真美術館」をつくらう！

福島県立博物館公式Twitterアカウントをフォローして、「#福島写真美術館」をつけてあなたにとっての「福島」の写真を投稿してください。投稿の際には、写真のタイトルとコメントも添えてください。博物館公式Twitterでリツイートいたします。